

第 8 回(令和元年度) 名古屋大学水田賞

門 亜樹子『ジャン・バルベラックの道徳思想』講評

ジャン・バルベラックについては、思想史上の重要性は広く認められはしても、その研究は、内外ともにおいて、あまりに希薄であった。本研究は、やっと出現した、本格的な研究である。本研究は、まず第 1 に、バルベラックの著『道徳哲学史』(1706 年)を丹念に読み解き、自然法論の翻訳者にとどまらない、その独自の思想の全体像を描く試みとして、画期的であり、第二に、そうして明らかにされるバルベラックの思想を近代思想史上に、新文脈の開拓にも挑みながら、位置づけようとした点で、創造的である。

第二の点について、さらに具体的に言えば、まず、普通は自然法論史の中で扱われるバルベラックを、宗教思想から啓蒙思想への転換という大きな射程と文脈において再認知しようとし、続いて、その文脈を、スコットランド啓蒙におけるモラル・サイエンスの形成過程に集約し、バルベラックの意義をクローズ・アップし、さらに、バルベラックの思想の影響圏を、トマス・リード、ドゥガルド・ステュアート、ピエール・プレヴォを媒介項とし、大陸でのフランス革命後のカント問題にまで拡大深化した。特に、この最後の点は、フランス思想史研究にとっても、貴重な貢献となるであろう。

本研究には、今後一層の視野拡大を期待したい。第 1 に、バルベラックの思想分析については、翻訳文の検討も含め、より体系的な検討の必要が残されている。第二に、宗教思想からの脱却という問題圏では、ピエール・ニコルの「利己心」論のみならず、少なくともパスカルとの比較が不可欠であり、その延長上に、18 世紀のヴォルテールとルソーの利己心論争を視界におく必要がある。第三に、スコットランド思想との関係では、現状では、ティロットソンを介したイングランド経由のトマス・リードへの影響に限定されているので、啓蒙思想全体への射程の拡大を期待したい。また、大陸でのカント問題についても、大陸独自の思想問題の分析を視野において再検証してもらいたい。

以上、本研究は、第 8 回水田賞受賞に値する業績と評価される。